

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## Report on the Lexical Prosodic System of Nouns in the Southern Ryukyuan Yaeyama Miyara Dialect

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: セリック, ケナン, 麻生, 玲子, 中澤, 光平, CELIK, Kenan, ASO, Reiko, NAKAZAWA, Kohei メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00003519">https://doi.org/10.15084/00003519</a>

## 南琉球八重山語宮良方言の名詞アクセント資料

セリック・ケナン<sup>a</sup>      麻生玲子<sup>b</sup>      中澤光平<sup>c</sup>

<sup>a</sup> 国立国語研究所 研究系 言語変異研究領域

<sup>b</sup> 名桜大学

<sup>c</sup> 東京大学

### 要旨

本稿では、南琉球八重山語宮良方言の名詞アクセント体系に関する遠隔調査の結果を報告する。今回の調査では次の3点が明らかになった。第一に、先行研究の記述の通り、単純名詞は2つのアクセント型（下降型・平板型）が区別される。第二に、2つの名詞から成る複合語の大部分においては複合語全体の音調が前部要素のアクセント型で決まっており、いわゆる「複合アクセント法則」が成立している。ただし、少数の複合語においては異なるパターンも観察される。第三に、下降型の単純名詞は琉球祖語のA系列に、平板型の名詞はBC系列に所属するという規則的な対応関係が見出される。なお、関連データとして720語の名詞についてその所属情報を提示する\*。

**キーワード：**宮良方言, アクセント体系, 複合アクセント法則

### 1. はじめに

八重山語のほとんどの方言において、アクセントの対立があることはよく知られている（秋永1960, 平山他1967）。各方言のアクセント体系についてこれまで数多くの研究が進められてきたが、報告地点の偏りが目立つ。アクセント体系が詳細に記述された方言は、管見の限り与那国（上野2010, 2011a, 2011b, 2013, 2014, 2016など）、鳩間（ローレンス1997a, 1997b）と竹富（久野マリ子1990）に限られるであろう。他の地点に関しては、特に名詞におけるアクセント型の対立の整理を主要な目的としてきた研究が多い（秋永（1960）、平山・中本（1964）、平山他（1967）、松森（2015, 2016）、麻生・小川（2016）、中川・セリック（2019）など）。そのため、動詞、形容詞、複合語など、詳細な記述が報告されていない地点が多く残っている。

各方言における単語のアクセント型の所属情報についても同様の状況である。すなわち、著しい地点の偏りが見られる。大規模な語彙集（辞書等）に収録されている語彙についてアクセント型の所属が分かっている方言は石垣（宮城2003）、鳩間（加治工2020）と与那国（上野の一連の報告と与那国方言辞典編集委員会（編）（2021））だけである。他のいくつかの方言については、数百語～2000語程度の語彙リストが報告されている<sup>1</sup>が、アクセント型の所属がほとんど分かっ

\* この研究は以下の助成を受けている：科研費21H00353, 19K13174, 19H05353, 18K12390。本稿は2021年5月16日開催の日本語学会2021年度春季大会で発表したものを敷衍した内容となっている。なお、遠隔調査にご協力いただいた宮良のインフォーマントに心より感謝を申し上げます。

<sup>1</sup> 竹富：ローレンス（2013, 2019）、前新他（2011）、石垣白保：中川・セリック（2020）、西表古見：加治工（1998, 2001, 2012, 2013, 2014）。

ていない方言はいまだに多く残っている<sup>2</sup>。

以上のような背景から、八重山語の一方言であり、かつアクセントの先行研究がほとんどない宮良方言（自称 *me:ŋramuni*）を取り上げ、そのアクセント体系に関する詳細な記述研究を目指す。その第一歩として、遠隔調査で一人の話者（男性、昭和8年生）から得られた1570点の音声データを用い、単純名詞と複合名詞において観察されるピッチパターンとその解釈について初期報告を行う。

## 2. 宮良方言

### 2.1 概要

宮良方言は、沖縄県石垣市字宮良で伝統的に話されている言語である<sup>3</sup>。石垣市の南部は縦じま模様のように南北方向に細長く字が分かれており、宮良は東から2番目に位置する字である（図1）。Davis (2014, 2016b)によると、宮良方言は系統的に八重山語に属するものの、八重山語内におけるその位置づけは難しい。歴史的には1771年に起きた明和の津波によって人口が大幅に減少したことにより、小浜島から宮良村への強制移住があったことが知られている（石垣2013）。ただし、宮良方言の話者の直感によると、小浜方言よりも宮良付近で話されている石垣市中心部の方言（石垣四箇方言）の方が理解しやすいとのことである（Davis 2016b: 172）。八重山諸方言の系統関係を論じたローレンス（2000）では宮良方言が取り上げられていないが、その研究で提案されている共有改新を宮良方言の語彙データに照らし合わせると、宮良方言は複数の系統を引いている可能性が示唆される。石垣方言と同じように、「雨」における第1音節の長音化を共有している（小浜は *ami*）一方、「しゃっくり」の語形は小浜と同じく *sakurube:* となっていて、石垣方言の *sakubai* とは異なっている。

平成30年度の石垣市の統計によると、字宮良の人口は1837人（平



図1 八重山諸島と字の名

<sup>2</sup> 石垣真栄里, 石垣大浜, 石垣宮良, 石垣椋海, 黒島, 小浜, 西表網取, 波照間など。

<sup>3</sup> 仲原 (2003) によると、宮良方言の音素体系は子音17個 (/p, b, t, d, k, g, s, z, c [ts] ~ [tʃ], m, n, r, n, w, j, h, ' [ʔ]/) と母音6個 (/i, i:, e, a, u, o/) からなる。上記の他に /R, Q, N/ の拍音素を認めている。これに対して、Davis (2016b) は /l/ を子音音素として認めず、/h/ とは別に /f [ɸ]/ の音素を認めている。なお、同研究によると母音の長短の対立が確認されているのは /a, i, u/ の3つである。本研究では、Davis (2016b) の分析に従うが、語形はIPAで提示する。

成 29 年 12 月時点)である(石垣市企画部企画政策課(編)2019)。宮良方言の話者人口に関して、Davis (2014) は 2010 年の段階で 500 人前後だと推定している。10 年経過した現在では、それよりも減少していると予想される。

## 2.2 先行研究

宮良方言に関する先行研究には、文法を扱ったものが多く存在する。伊豆山の一連の研究(伊豆山 1997, 1999, 2000, 2001a, 2001b, Izuyama 2003)の他に、個別の文法現象を扱った研究の蓄積がある(新垣 2000, 下地 2010, Davis 2013, 2015, 2016a, 2016b, Davis & Lau 2015, 荻野 2018)。

一方で音声・音韻やアクセントに関する研究は文法研究と比べると少ない。音声・音韻に関するものには仲原(2003, 2005), Arakaki(2004), Davis(2016b)の研究がある。アクセントに関しては、秋永(1960), 平山・中本(1964)と平山他(1967)のみである。アクセントに関する先行研究については 2.3 節で詳しく述べる。

語彙に関しては 1280 語(重複を含む)を報告した中松(1987)と、宮良方言話者がまとめた、約 5000 項目を収録した語彙集(石垣 2013)がある。ただし、このいずれの語彙集にもアクセント情報が掲載されていない(中松(1987)は 69 語についてのみアクセント情報を載せている)。なお、宮良は LAJ(日本語地図)の調査地点にもなっている(国立国語研究所 1966)。

## 2.3 アクセントに関する先行研究

宮良方言のアクセントに関する 3 つの先行研究に関して述べる。まず、秋永(1960)は、共通語の 1 拍 1 音節・2 拍 2 音節語に対応する名詞の型を提示した。その後、平山・中本(1964: 86)と平山他(1967: 40-41)では宮良方言のアクセント体系に関してもう少し詳しく記述を行っている。この 3 点の研究によると、宮良方言の名詞アクセント体系はピッチの下降の有無によって対立する 2 つのアクセント型を持つ。1 つ目のアクセント型(「頭高型」)は語頭から 1 拍目の直後におけるピッチの局所的な下降によって実現する(1a)<sup>4</sup>。これに対して、2 つ目のアクセント型はピッチの局所的な動きを伴わず、平たく発音される(秋永では「高平」となっているが、平山では「低平型」として記述される)(1b)。

### (1) a. 頭高型

- u]sɪ, u]sinu ... 「牛, 牛が<sup>s</sup> ...」,  
 pa]na, pa]nanu ... 「鼻, 鼻が<sup>s</sup> ...」,  
 ki];, ki]:nu ... 「毛, 毛が<sup>s</sup> ...」  
 a]kubi 「欠伸」

<sup>4</sup> 本稿ではピッチの局所的な上昇および下降をそれぞれ [ と ], ピッチの小幅な下降を !, 拍内下降を ]] の記号で表し、接語境界を =, 複合語境界を + で表す。発話が高く始まることを前提にしているため、発話が低く始まる場合に限って語頭の前に ] の記号を添える。なお、本稿の「接語」は便宜的に助詞を指し、その詳細な認定は別稿に譲る。

pa]natsi 「鼻血」

ka]:ra 「川」

b. 低平型

]jama, ]jamanu ... 「山, 山が<sup>s</sup> ...」

]hana, ]hananu ... 「花, 花が<sup>s</sup> ...」

]φuni, ]φuninu ... 「船, 船が<sup>s</sup> ...」

]kujun 「暦」

]takara 「宝」

]garasa 「烏」

平山他 (1967: 40) より表記一部改変

なお、頭高型に所属する名詞のうち第1音節が無声化する語はピッチの下降が1拍分遅れる(2)。さらに、第1音節が無声化していない語でも単独では頭高型で実現しているながら、1拍助詞が付くと下降が遅れて実現することがある(3)。この現象を受け、平山・中本(1964)は宮良方言の頭高型においてピッチの下降が右へずれるという変化が進みつつあると述べている。

(2) p̄itu, p̄itu]nu ... 「人, 人が<sup>s</sup> ...」

p̄ata, p̄ata]nu ... 「旗, 旗が<sup>s</sup> ...」

φ̄uta]i 「額」

s̄ika]ra 「力」

p̄ata]tsi 「二十」

平山他 (1967:40) より表記一部改変

(3) u]tu, ]u[tu]nu ~ utu]nu ... 「音, 音が ...」

平山・中本 (1964: 86) より表記一部改変

### 3. データ

本研究のデータは2020年12月と2021年3月に行った遠隔調査で得られたものである。協力者は宮良出身で現在も宮良地区に在住の男性話者(昭和8年生)である。

音声データの収集はマイク内蔵型のICレコーダー(パナソニックRR-XS470, wav形式)で行った。録音機を話者に送付し、調査票を読み上げてもらい、録音機本体を返送してもらう方法で調査を行った。録音機器の使用法に関するマニュアルの用意や、事前事後の電話によるフォローアップは行ったものの、録音中のやり取りは一切行わず、基本的に話者に一任して自由に行ってもらった。返送されてきたデータは、高機能の録音機やヘッドセットマイクなどを使用した録音に比べると音質は劣るが、ピッチの変動を確認するには十分であったと言える。

調査票(読み上げリスト)は『メーラム二用語便覧』中の600語の名詞(2拍~)から適宜選

んで作成した。合計で 1570 点の発話データ（内単独 778 点・用例 792 点）が収録できた<sup>5</sup>。

## 4. 結果

### 4.1 単純名詞

単純名詞の音調を単独発話と 1 拍助詞が後続した環境で分析した結果、2 つの対立するアクセント型（以下「下降型」と「平板型」）が区別されることが確認された。これは先行研究の記述と完全に一致する結果であるが、下降型の実現については若干の違いが観察された。

まず、単独発話の音調を見てみよう。単独発話の環境では語の長さやその音節構造とは無関係に 2 つのパターンが観察される (4) (5)。「下降型」は大幅なピッチの下降が実現するのに対して、「平板型」は末尾拍の直前に小幅なピッチの下降が実現する。詳しく見ると、下降型は名詞の長さによって下降の実現位置が異なる。すなわち、2 拍名詞の場合は 1 拍目の直後、3 拍以上の名詞の場合は 2 拍目の直後にピッチの下降が実現する。ただし、pitu「人」のように語頭の音節が無声化している 2 拍名詞は、ピッチの下降が 2 拍目内に実現する。なお、下降型は特徴的なピッチのピークを示している。つまり、下降型の下降開始点は平板型のそれより高く、下降型の下降終了点は平板型のそれよりも低い。これにより下降型においては、平板型よりも大幅かつ急激な下降が実現される（次頁の図 2 と図 3）。

- (4) a. ma:ji「米」, ka:]「井戸」, dʒu:]<sub>N</sub>「正常」  
 b. i:]dzu「魚」, t:]i:]mi「爪」, tu:]dzi「奥さん」  
 c. pi:]tu:]「人」, si:]ta:]「下」, ki:]fu:]「煙」  
 d. ma:]si:]ri「祭り」, ka:]dza:]ri「飾り」, bu:]na:]ri「姉妹」
- (5) a. ki:]「木」, ka:]!「皮」, mu:]<sub>N</sub>「麦」  
 b. ja:]du「戸」, mu:]<sub>nu</sub>「物」, mu:]<sub>mu</sub>「腿」  
 c. ka:]ta:]!「肩」, phi:]ku:]!「肺」, ta:]ki:]!「丈」  
 d. na:]sa:]bi「茄子」, fu:]mu:]tsi「書籍」, ta:]ba:]gu「タバコ」

以上見たように、単独発話において下降型と平板型が区別されるわけであるが、平板型の短い語（特に 1 音節語）において末尾拍の直前に起こる下降が大きく実現することがある。この場合、下降型と区別することが難しい。

次に、1 拍助詞が後続した環境、つまり X=nu Y「X の Y（X は対象語、Y は任意の名詞）」の枠文における音調を見てみよう<sup>6</sup>。この環境においてもやはり 2 つのパターンが観察される (6)

<sup>5</sup> 当初は単独の発音と統一的な枠文に埋め込んだ発話収録を想定していたが、返送されてきた音声には、対象の名詞を単独の発話で収録したものの他、話者自身が対象の名詞について思いついた用例が豊富に収録されていた。話者による用例は対象の名詞を含んでいない場合や、関連する単純語や複合語である場合もあり、様々であった。このように豊富な言語資料が提供され、宮良方言の複合語に関する問題提起ができた反面、今回の調査では統一的な枠文で名詞の音調を観察することはできなかった。

<sup>6</sup> X=nu Y という構文が特殊な韻律的な振舞を示すと報告されている南琉球の方言がある（五十嵐 2015、青井 2018）。しかし、宮良方言では特殊な韻律的な振舞いは観察されず、X=nu … の音調は他の 1 拍助詞が後続した環境と同じピッチパターンを示している。

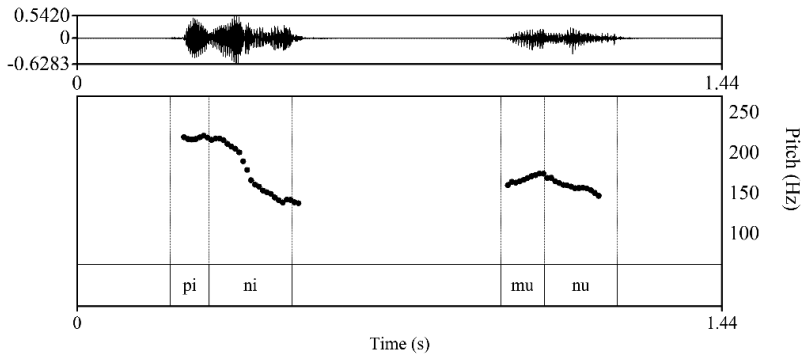


図2 pi]ni「髭」と mu!nu「物」の単独発話

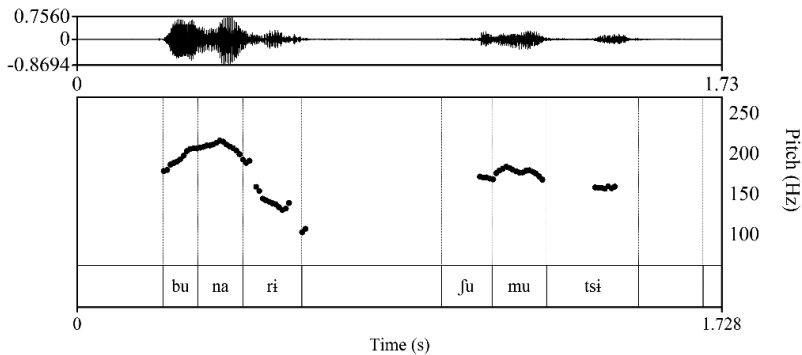


図3 buna]ri「姉妹」と fumu!tsi「書籍」の単独発話

(7). 下降型は語の長さとは無関係に2拍目の直後に大幅なピッチの下降が実現する。これに対して、平板型はピッチの変動がほとんどなく文節全体が平たく発音される。単独発話と同様に下降型はピッチのピークを示しており、下降の開始地点の高さは平板型の高さに比べると高い。しかし、単独発話と異なり、下降の実現位置は2拍名詞でも一貫して2拍目の直後にある。

- (6)
- mai]=nu ... 「米の ...」
  - idzu]=nu ... 「魚の ...」
  - pitu]=nu ... 「人の ...」
  - matsi]ri]=nu ... 「祭りの ...」
- (7)
- ki:=nu ... 「木の ...」
  - jadu=nu ... 「戸の ...」
  - kaṭa=nu ... 「肩の ...」
  - nasabi=nu ... 「茄子の ...」

(6) および (7) に挙げた例から分かるように、同じ語に対して単独発話と X=nu Y の枠文で観察される音調が対応している。つまり、単独発話で大幅なピッチの下降が実現する語は X=nu



Yの環境でも大幅な下降が実現する。これに対して、単独発話で小幅なピッチの下降が実現する語はX=nu Yの環境では平たく発音される。さらに、最小対も見つかっている(8)。このことから、観察される音調の違いは語彙的に指定されると解釈することができ、宮良方言の単純名詞は少なくとも2つのアクセント型が対立すると言える。

- (8) a. ma:ji 「米」 対 ma:li 「前」  
 b. ka: 「井戸」 対 ka:l 「皮」  
 c. ka:ra 「川」 対 ka:lra 「瓦」

現時点では、この2つのアクセント型はピッチの下降の有無によって対立すると想定することができる。具体的にいうと下降型は2拍目の直後に大幅なピッチの下降が実現する。これに対して平板型はピッチの変動を伴わない。平板型でも単独発話の環境において若干のピッチの下降が観察されることがあるが、これはアクセント型とはおそらく無関係で、発話末のイントネーションによる現象と考えられる。下降型と平板型の実現を表1にまとめる。

表1 単純名詞の音調 ( $\mu$ : 1拍分)

型	拍数	単独発話	X=nu ...
下降型	2	$\mu] \mu (\sim \mu \mu)]$	$\mu \mu]=nu \dots$
	3	$\mu \mu] \mu$	$\mu \mu] \mu=nu \dots$
平板型	2	$\mu! \mu$	$\mu \mu=\mu \dots$
	3	$\mu \mu! \mu$	$\mu \mu \mu=\mu \dots$

以上の結果は、2つのアクセント型が区別されるという点で先行研究の記述と一致する。しかし、下降型の実現については違いが見られる。すなわち、先行研究では下降型におけるピッチの下降が1拍目の直後に実現すると記されていることに対し、本稿では(文節が3拍以上である場合)ピッチの下降は一貫して2拍目の直後に実現すると報告した。つまり、下降型におけるピッチの下降位置が1拍分遅れている。この違いは歴史的な変化によるものだと考えられる。平山・中本(1964)で、頭高型においてピッチの下降が右へずれるという変化が進みつつあると指摘されていることから、先行研究の協力話者(古い世代)と本稿の協力話者(若い世代)の間でピッチの下降が遅れるという変化がより進んだと言えるだろう。

#### 4.2 複合語名詞

本節では、2つの単純名詞から成る複合語に関する結果について述べる。

大半の複合語では複合語全体の音調が前部要素によって決まるというパターンが観察される。例えば、前部要素が下降型に所属する複合語は下降型のパターンで実現する。これに対し、前部要素が平板型に所属する複合語は平板型のパターンで実現する(表2)。



表2 複合語の音調 (F: 下降型, L: 平板型)

前部要素		後部要素		複合語	
sɪta <sup>F</sup>	「下」	pa: <sup>F</sup>	「葉」	sɪta]pa:	「下部の葉っぱ」
sɪta <sup>F</sup>	「下」	pa: <sup>L</sup>	「菌」	sɪta]pa:	「下菌」
a:ri <sup>F</sup>	「東」	kadzɪ <sup>F</sup>	「風」	a:]rikadzɪ	「東風」
a:ri <sup>F</sup>	「東」	tida <sup>L</sup>	「太陽」	a:]ritida	「東太陽」
tumo:ri <sup>L</sup>	「海」	idzu <sup>F</sup>	「魚」	tumo:riidzu	「海の魚」
tumo:ri <sup>L</sup>	「海」	suku <sup>L</sup>	「底」	tumo:risuku	「海底」
sima <sup>L</sup>	「島」	kabutʃa <sup>F</sup>	「南瓜」	simakabutʃa	「島南瓜」
sima <sup>L</sup>	「島」	muni <sup>L</sup>	「言葉」	simamuni	「方言」
kʊtsi <sup>F</sup>	「腰」	puni <sup>L</sup>	「骨」	kʊtsi]buni	「腰骨」
buʃa <sup>F</sup>	「腰」	puni <sup>L</sup>	「骨」	buʃa]buni	「腰骨」
naka <sup>L</sup>	「中」	puni <sup>L</sup>	「骨」	nakabuni	「風の中の骨」
so:gi <sup>L</sup>	「筈」	puni <sup>L</sup>	「骨」	so:gibuni	「肋骨」

ここで重要なのは、同じ前部要素に対して後部要素がどのようなアクセント型（下降型あるいは平板型）であっても、複合語全体の音調が前部要素のアクセント型と完全に一致することである。同様に、同じ後部要素でも前部要素のアクセント型が異なれば、複合語のアクセント型が変わる。つまり、これらの複合語においてはいわゆる「複合アクセント法則」（平山1936, 上野2012）が成立していると言える。

しかし、一方で複合アクセント法則では説明できない複合語も数語観察された。これらの複合語は、前部要素が平板型であるにもかかわらず、複合アクセント法則が適用された場合の予測とは違ってピッチの下降が実現する (9) 7。

- (9) a. sima]dzima 「島々」 < sima<sup>L</sup> 「島」 + sima<sup>L</sup> 「島」  
 b. ma:]ʃa: 「子孫」 < ma:<sup>L</sup> 「孫」 + ʃa:<sup>F</sup> 「子」  
 c. du:]buni 「体の骨・筋肉」 < du:<sup>L</sup> 「体」 + puni<sup>L</sup> 「骨」

ただし、これらの複合語に観察される下降は、下降型で観察される下降と性質が異なるようである。具体的に言うと、前部要素が下降型で複合アクセント法則が適用される場合、語頭から2拍目の直後に大幅かつ急激なピッチ下降が実現する。これに対し、(9) の例のように前部要素が平板型の場合、2拍目の後に実現するピッチの下降は下降型で観察されるものに比べ、幅が小さく聞こえる。すなわち、下降の開始地点におけるピッチの値は下降型より低い<sup>8</sup>。

前部要素が平板型でピッチの下降が実現する複合語の解釈については、次のような可能性が考えられる。第一に、複合アクセント法則が成立しており、複合語の音調は前部要素のアクセント型によると解釈するものである。この解釈では、平板型の中に複合語における音調を基に2種類

<sup>7</sup> 同じパターンを示すものとして、通時的に非 A 系列 (5 節参照) の形容詞を前部要素に含む複合語も見ついている (uʃu]kadʒi 「台風」, uʃu]kui 「大声」など)。

<sup>8</sup> ただし、データが少なく、また音質が優れていないため、現時点では必ずしも有効な比較ができていないとも言えない。下降の性質に関する音声的な検討は今後の調査課題とする。

の異なるアクセント型を認め、さらにこの2つのアクセント型は、単純名詞の環境においては完全に中和する、というアクセント体系を想定する必要がある。中和環境の範囲がこれほど広いようなアクセント体系は異様に見えるかもしれないが、特定の複合語においてのみ対立が観察され、他の環境では中和するような体系は、同じ南琉球の宮古語に報告されている（与那覇方言：松森(2013)、皆愛方言：セリック(2021)）。第二に、語彙的に指定されるアクセント型とは別に、特定の（韻律的あるいは構造的な）条件の下で起こる「下降現象」が存在すると解釈するものである。この場合、境界下降型になる複合語には何らかの偏りが観察されると予測される。

現時点では、どちらの解釈が妥当であるかを検証するための十分なデータがないが、前部要素が平板型で下降が実現する複合語は少数で、かつ特殊な構造を持つことが指摘できる。(9)に挙げた複合語のうち、1語は重複形であり、もう1語は並列の構造を持っている。このことは、第二に挙げた解釈の方が妥当であることを示唆している。なお、前部要素が平板型の複合語においてピッチの下降が生じるという現象には語内部の構造という形態的要因が関わっているため、第二の解釈の仕組みとして、重複形や並列構造を持つ複合語において形態素境界に下降が生じる、という仮説を立てる。残念ながら、現時点のデータではこのパターンを示す複合語はすべて前部要素が2拍であるため、この仮説をただちに実証することはできない。よって、今後の調査において、重複形や並列構造をもち、前部要素が3拍の複合語を対象とする必要がある。

## 5. 琉球祖語の系列との対応

琉球諸語に観察されるアクセントの区別は、琉球祖語にあったアクセントの反映であると考えられており、これまでの研究から、祖語にあったと想定される3つのアクセントのグループをA系列、B系列、C系列と呼んでいる（松森2000a, 2000b）。本節では、祖語（のアクセント型）を再建することを目的とした語彙リストである五十嵐（2019）のデータをもとに、琉球祖語の系列と宮良方言のアクセント型との対応関係を論じる。

五十嵐（2019）に基づき、宮良方言のアクセント型と琉球祖語との対応を確認したところ、表3の結果になった。

表3 宮良方言のアクセント型と琉球祖語との対応

琉球祖語系列	平板型（語数）	下降型（語数）
A	0	75
B	67	2
C	57	4

祖語のA系列には宮良方言の下降型が対応し、祖語のB系列とC系列には宮良方言の平板型が対応する（対応率97.1%）。このことから、宮良方言のアクセントは新たに生じた区別ではなく、祖語にあった区別を継承していることが分かる。そのため、宮良方言のアクセントをもとに、他の方言との通時的関係が明らかになる可能性がある。

ローレンスの一連の研究（ローレンス（2006, 2008）など）では、アクセントの不規則な改新が方言間の系統関係の推定に利用されている。ローレンス（2020）によれば、（与那国を除く）



- アー a: L 粟。  
 アーサ a:sa L アオサ。  
 アーザ a:dza L 長男。  
 アーサヌ スウル a:sanu siru L F アオサの汁。  
 アーダニ a:dani L 粟の種。  
 アーミ a:mi L 雨。  
 アーミフム a:miφumu L 雨雲。  
 アーヤ a:ja L 父。  
 アーリウ a:ri F 東。  
 アーリウカジ a:rikadzgi F 東風。  
 アーリウティダ a:ritida F 朝日。  
 アイク aiku L 天秤棒。  
 アウダ auda L カエル。  
 アウダ auda L 畚 (もっこ)。  
 アウバトウ aubatu L 鳩の一種。  
 アウムスウ aumusi L 青虫。  
 アカイ akai F シャクシ。  
 アカイル akairu F 赤色。  
 アカカビウ akakabi F 赤紙。  
 アカティダ akatida F 強い日差しの太陽。  
 アカヌヌ akanunu F 赤布。  
 アカパナ akapana F 赤花。  
 アカマイ akamai F 赤米。  
 アカマズウ akamadzi L 髪。頭髮。  
 アカマミ akamami F 小豆。  
 アカリウ akari F 明かり。光明。光。  
 アカンダ akanda F 赤土。粘土。  
 アギ agi F 陸。  
 アクビウ akubi F 欠伸。  
 アサムヌ asamunu L 朝飯。  
 アザリウ adzari F 棘。  
 アザリウ adzari F ヤエヤマノイバラ。  
 アシ a:ji L 汗。  
 アシヤブ a:fabu F おでき。疥癬(かいせん)。出来物。  
 皮膚病。吹き出物。  
 アズウ adzi F 味。妙味。  
 アスウザ asidza L 下駄。  
 アスウトウ asitu L 明後日。  
 アダニ adani L アダン。  
 アツウマーリウザー atsimaridza: L 集会場。  
 アッコン akkon F 芋。  
 アッチャ attja L 父。  
 アツァ attsa L 明日。  
 アディフ adiφu L アデク。  
 アドゥ adu L かかと。  
 アバ aba L 油。石油。灯油。  
 アバサ abasa L ハリセンボン。  
 アブスウ abusi L 畔。  
 アミ ami F 鮎。  
 アミスウズウ amisidzi F 鮎玉の大きさ。  
 アラガー araga: F 新川。  
 アン an L 網。  
 アンネー anne: L 母。  
 アンマー anma: L 姉。  
 イーリウ i:ri L 錐。  
 イーリウ i:ri F 西。  
 イーリウティダ i:ritida F 入り日。西日。夕日。  
 イクサ ikusa L 戦争。  
 イシ i:ji F 石。  
 イシャ ifa L 医者。  
 イシヤナギ ifanagi F 石垣。  
 イズ idzu F 魚。  
 イズ idzu F 意地。  
 イスウキウ isiki L 息。呼吸。  
 イスウスウ isisi F 石臼。  
 イタヤドウ itajadu L 板戸。  
 イツウツウ itsitsi L 五つ。  
 イトウマ ituma L 暇。休暇。  
 イナカ inaka F 田舎。  
 イナビ inabi L 粉米。  
 イニ ini L 稲。  
 イノー ino: L 竜巻。  
 イノー ino: L 砂。  
 イビスウ ibisi F 引っ込み思案。  
 イビリウ ibiri L エビ。  
 イミ imi L 忌み。喪。  
 イミ imi L 夢。  
 イラギウ iragi L 鱗。  
 イリバー iriba: F 入れ歯。  
 イリムティ irimuti F 西表。西表島。  
 イリムティスマ irimutisima F 西表島。  
 イリムティヤマ irimutijama F 西表山。  
 イル iru L 色。  
 ウイ ui F 上。  
 ウイピウトウ uipitu L 年寄り。老人。  
 ウーキ u:ki L 桶。樽。  
 ウーツウツウ u:tsitsi L 大槌。  
 ウーリウ u:ri L 瓜。キュウリ。  
 ウカギ ukagi L おかげ。  
 ウキウナー ukina: L 沖繩。  
 ウキウナーサブ ukina:suba L 沖繩蕎麦。  
 ウク uku F 奥。  
 ウクバー ukuba: F 奥歯。  
 ウクリウ ukuri F 火種。薪の炭火。  
 ウサイ usai L 御菜。肴 (さかな)。つまみ。  
 ウズ udzu L ふとん。  
 ウズウ udzi L ウナギ。  
 ウスウスウカナイ usisikanai F 牛飼い。  
 ウスウナマ usinama F 小牛。  
 ウスウニク usiniku F 牛肉。  
 ウタ uta L 歌。  
 ウツウツウ utsitsi L 打撲傷。  
 ウデイ udi L 腕。

ウデイカキ アサビウ udikaki asabi L F 腕相撲遊び。  
 ウテイドウ utidu L 不合格。  
 ウトウ utu F 音。  
 ウトウ utu F 評判。  
 ウトウドウ utudu L 弟。年下。  
 ウドウン udun L うどん。  
 ウナイ unai L ウナギ。  
 ウフアーミ uφu]a:mi 大雨。豪雨。  
 ウフカジ uφu]kadzi 大風。強風。  
 ウフキー uφuki: L 大木。  
 ウフクイ uφu]kui 大声。  
 ウフサラ uφusara L 大皿。  
 ウフス uφusu L 海水。  
 ウフズウ uφudzi L 曾祖父。  
 ウフツウ + ミズウ uφutsi+midzi L 海水。  
 ウフニンジウ uφu]nindzu 大勢。  
 ウフヤー uφuja: L 母屋。  
 ウマ uma L ここ。そこ。  
 ウムイ umui L 思い。意見。想い。所存。  
 ウムイ umui L 面繫 (おもがいに)。馬の枷 (かせ)。  
 ウムザ umudza L イノシシ。  
 ウムデイ umudi L 顔。  
 ウムトウヤマ umutujama F 於茂登岳。  
 ウヤ uja L 親。  
 ウヤギ ujagi L 金持ち。  
 ウヤグ ujagu L 親戚。親類。  
 ウヤパーブズウ u]apa:φudzi L 祖先。先祖。元祖。  
 ウヤフワー u]aφwa: L 親子。  
 ウリ uri L うるおい。  
 ウリ uri L これ。それ。  
 ウワビ uwabi F 上辺。  
 ウン un L 鬼。  
 ウンキウ unki F 濃み。  
 ウンキウ unki F 運氣。  
 ウンギウ ungi L 扇。団扇。  
 ウンザ undza L 彼奴 (あやつ)。  
 ウンドーカイ undo:kai L 運動会。  
 ウンドーゾー undo:dzo: L 運動場。  
 エーク e:ku L 權 (かい)。  
 オー o: L プタ。  
 オンギウ ongi L 団扇 (うちわ)。  
 オンタ onta L プタ。  
 オンヤ onja F 御嶽。  
 カー ka: L 皮。革。  
 カー ka: F 井戸。  
 ガー ga: L 耐久力。忍耐力。  
 カーギ ka:gi L 容姿。  
 ガーギウ ga:gi L 鎌。  
 カーサ ka:sa F 生活用水溜め。  
 カーチー ka:tji: L 夏至。  
 カーマ ka:ma L 遠方。遠い。

カーラ ka:ra L 瓦。  
 カーラ ka:ra F 川。  
 ガーラ ga:ra L カスミアジ。シマアジ。  
 カイ kai F おかゆ。  
 カキズウ kakidzi L ウニ。  
 カギン kagin L 加減。  
 カクズウ kakudzi L 顎 (あご)。  
 カザ kadza L 葛 (かざら)。クズ。蔓 (つる)。  
 カザ kadza L 匂い。  
 カザリウ kadzari F 飾り。  
 ガザン gadzan L 蚊。  
 カジ kadzi F 風。  
 カジフキウ kadzifuki F 風吹き。台風。  
 カタ kata L 肩。  
 カタ kata L イナゴ。バッタ。  
 カタズウ katadzi F 形。  
 カタナ katana L 刀。  
 カチ katji F 加勢。手伝い。  
 カツウ katsu: F カツオ。  
 カツウリウ katsiri F 飢え。  
 ガッコウ gakkou: L 学校。  
 カッテイ katti F 勝手。  
 カドウ kadu L 角。  
 カニ kani F 金。  
 カニ kani F 鉄。  
 カニ kani F 鐘。  
 カニパイ kanipai F 鎌。  
 ガバ gaba L 垢。  
 カビウ kabi F 紙。  
 カビウフクル kabifukuru F 紙袋。  
 カフ kafu F 果報。  
 カフ kafu L 幸福。幸せ。  
 カブチャ kabutja F カボチャ。  
 カブリウ kaburi F コウモリ。  
 カブリウキー kaburiki: F 木の一種。  
 カマ kama F あそこ。あっち。向こう。  
 カミ kami L 鬘。  
 カミ kami L ウミガメ。  
 カミザー kamidza: L 上座。  
 ガヤ gaja L 茅。チガヤ。  
 ガラサ garasa L カラス。  
 カラテイ karati L 空手。  
 カリキー kariki: F 枯れ木。  
 カン kan L 神。  
 キー ki: L 木。  
 キー ki: F 毛。  
 キーウリウ ki:uri L キュウリ。  
 キーズウ ki:dzi F 系図。  
 キース バー ki:nu pa: L F 木の葉。  
 キームトゥウ ki:mutu L 木元。  
 キウスウムヌ kisimunu F 服。  
 キウヌ kinu F 昨日。

- キウム kimu L 肝。心。  
 キウムク kimuku L 肝と肺。  
 キウン kin L 着物。衣。  
 キザスウ kidzasi F 兆候。  
 キザミタバグ kidzamitabagu L 刻み煙草。  
 キズウアトウ kidziatu F 傷跡。  
 ギスウク gisiku L 式。  
 キズウグツウ kidzigutsi F 傷口。  
 キズウナカ kidzinaka F 傷の中。  
 キナイ kinai F 世帯。  
 キネー kine: F 家庭。所帯。  
 キフ kifu F 煙り。  
 キブスウ kibusi F 湯煙。  
 キブリウカーズウ kiburika:dzi F 家庭ごと。  
 キュー kju: L 今日。  
 キョーダイ kjo:dai L 兄弟。  
 キンコ kinko F 金庫。  
 キンシュー kinʃu: L 崖。断崖。  
 ギンミ ; ginmi: L 吟味。相談。  
 クイ kui L 声。  
 クース ku:su L トウガラシ。  
 クーマミ ku:mami F 小豆 (あずき)。  
 クガ kuga L 壜丸。  
 クガニ kugani F 黄金。  
 ククル kʉkuru L 心。  
 グサン gusan L 杖。  
 グシ guʃi L 酒。  
 クシキ kuʃiki L 戸籍。  
 クズ kudzu L 去年。昨年。  
 クズ kudzu L タイワンクス。トウズルモドキ。  
 グスウク gusiʃku L 石垣。垣根。  
 クダヒ kudahi F 下痢。  
 クチ kʉʃi F 腐蝕。  
 クツウ kʉʃsi F 背中。  
 クツウブニ kʉʃsibuni F 腰骨。  
 クトウ kʉʃtu L 事。  
 クトウ kʉʃtu F 琴。  
 クトウスウ kʉʃtusi F 今年。  
 クニ kuni F 国。  
 クバ kuba F ビロウ。  
 クバン kuban F 碁盤 (ごばん)。  
 クビ kubi F 壁。  
 クブ kubu L 昆布。  
 クム kumu L 雲。  
 クムスウ kumusi L 油虫 (=ゴキブリ)。  
 クムリウ kumuri L 池。沼。水溜り。  
 クムリウ kumuri L 珊瑚礁の窪み。  
 クユビ kujubi F 小指。  
 クユン kujun L 暦。  
 クリ kuri F これ。それ。  
 クルキウ kuruki L リュウキウコクタン。  
 クルバシヤ kurubafʌ L ロータリー。
- クルマ kuruma L 車。自動車。  
 クルマダイ kurumadai L 車の値段。  
 クワースウ kwa:si L 菓子。  
 クワイシキジン kwaiʃikidʒin L 会席膳。  
 クンキウ kunki F 根気。  
 クンザ kundza L 彼奴 (あやつ)。  
 グンスウ gunsi F 指示。  
 クンドウ kundu L 今度。  
 ケーズウ ke:dzi L マルバチシャノキ。  
 ケーラ ke:ra L 一同。皆様。  
 ケーリ ke:ri L 切れ。  
 ゴーサ go:sa L 疥癬 (かいせん)。皮膚病。  
 ゴーヤ go:ja L ニガウリ。  
 コーリ ko:ri L 柳ごうり。  
 コフタ koʃʉta L かさぶた。  
 コロナ korona L コロナ。  
 サーゴー sa:go: L 咳 (せき)。  
 サーフ sa:ʃu F 作法。  
 サーフ sa:ʃu F 仕事。  
 ザームツ dza:mutsu L 筵。  
 ザイギ dzaigi L 材木。  
 ザガ dzaga L ヤモリ。  
 サカミツウ saʃkamitsi F 坂道。  
 サカヤ saʃkaja F 酒屋。酒造所。  
 サキカミ saʃkikami F 酒瓶。  
 サキダル sakidaru F 酒樽。  
 サキフチ saʃkiʃʉʃi F 酒癖。  
 サズウ sadzi L 鉢巻。  
 サタ sata L 沙汰。うわさ。評判。  
 サト sato L 里。  
 サナ sana L 傘。  
 サネー sane: L ふんどし。  
 サバ saba F 草履。  
 サバニ sabani L 刳船。  
 サバニフニ sabanifuni L 刳り船。  
 サン san L シラミ。  
 サン san F お守り。  
 ザン dzan L ジュゴン。  
 シートウ ʃi:tu L 生徒。  
 シートーヤー ʃi:to:ja: F 製糖工場。  
 シーブ ʃi:bu L 勝負。決着。  
 シカ ʃika L 鹿。  
 シカキ ʃikaki F 仕掛け。装置。罟。  
 ジカタブウ dʒikatabi L 地下足袋。  
 シキムス ʃikimunu F 漬物。たくあん。  
 シキユーアバ ʃikiju:aba F 石油。  
 シグトウ ʃigutu F 職業。  
 シザウトウドウ ʃidzaʃutudu 兄と弟。  
 シジャ ʃidʒa L 兄。先輩。年上。  
 シジャブナリウ ʃidʒabunari L 兄弟と姉妹。  
 シジャマリー ʃidʒamari: L 長男。  
 シニ fini L 脛 (すね)。

シューブン *ʃu:bun* L 秋分。  
 シュビウ *ʃubi* F フェイ。  
 シュムツウ *ʃumutsu* L 書物。  
 シュリジヨウ *ʃuridʒo:* L 首里城。  
 シュワ *ʃuwa* F 心配。不安。  
 ジュン *dʒun* F 正常。  
 シュンブン *ʃunbun* L 春分。  
 ショングツウ *ʃongatsi* L 正月。  
 シル *ʃiru* F 城。  
 ジンカニ *dʒinkani* L 金銭。お金。  
 ジンカニモーキ *dʒinkanimo:ki* L 金儲け。  
 ズウー *dzi:* L 字。文字。  
 ズウー *dzi:* L 地面。土地。  
 ズウーマスウ *dzi:masi* L 地所。土地。  
 スーギラ *su:gira* L シャコガイの一種。  
 ズウグ *dʒigu* L デイゴ。  
 スウコップ *ʃikoppu* L スコップ。  
 スウスイル *ʃisuiru* L 白色。  
 スウスヌヌ *ʃisununu* L 白布。  
 スウタ *ʃita* L 舌。  
 スウタ *ʃita* F 下。  
 スウタパー *ʃitapa:* F 下歯。  
 スウタパー *ʃitapa:* F 下葉。  
 スウトウムデイ *situmudi* L 朝。  
 スウナ *sina* F 品。  
 スウナダ *sinada* L 仕草。態度。  
 スウバリウ *sibari* L 小便。尿。  
 スウマ *sima* L 相撲。  
 ズウマ *dzima* L どこ。  
 スウマカブチャ *simakabutʃa* L 烏カボチャ。  
 スウマズウマ *sima]dzima* 烏々。  
 スウマムニ *simamuni* L 方言。  
 ズウリ *dziri* L どれ。  
 スウル *siru* L 汁。  
 スウルアカイ *siruakai* L お玉杓子。  
 スデイ *sudi* F 袖。  
 スバ *suba* L 蕎麦（そば）。  
 スラ *sura* L 先。  
 ズー *dzo:* L 門。  
 ソーギブニ *so:gibuni* L あばら骨。胸骨。肋骨。  
 ソーズウ *so:dzi* L 掃除。  
 ター *ta:* L 田。  
 タータビウ *ta:tabi* L (田んぼ用の) 足袋。  
 ダイ *dai* F 値段。  
 タイク *taiku* L 太鼓。  
 タカパナ *taʃapanana* L 高い鼻。  
 タキ *taʃi* L 丈。  
 タキ *taki* F 竹。  
 タキザイク *taʃidzaiiku* F 竹細工。  
 タキフドウ *taʃiʃudu* L 身長。  
 ダスウ *dasi* L 出し汁。  
 タタカイ *taʃakai* L 戦い。

タニ *tani* L 男性の性器。  
 タニ *tani* L 種子。  
 タバグ *tabagu* L 煙草。  
 タビウ *tabi* F 旅。  
 タブ *tabu* F 足袋。  
 タブ *tabu* F タブノキ。  
 ダブ *dabu* F 葬式。  
 タブキー *tabuki:* L タブノキ。  
 タヤ *taja* L 嫉妬。  
 タンキウムヌ *tankimunu* F 短気者。  
 タンスウ *tansi* L 箒筒。  
 チビ *tʃibi* F 最後。尻。しんがり。びり。  
 チミ *tʃimi* F 爪。  
 チャーミズウ *tʃa:midzi* L お茶の水。  
 チャクスウ *tʃakusi* L 長男。  
 チャクマー *tʃakuma:* L 長男からの孫。  
 チャブン *tʃabun* L 茶盆。  
 チュラカーギ *tʃuraka:gi* L 美人。  
 チョーチョー *tʃo:tʃo:* L 蝶々。  
 ツウー *tsi:* F 釣り針。  
 ツウー *tsi:* L 乳。  
 ツウカラ *tsʃikara* F 力。  
 ツウキウ *tsiki* L 月。  
 ツウキウリウムヌ *tsikirimunu* L 作物。農作物。  
 ツウズウ *tsidzi* F 頂上。  
 ツウブ *tsibu* F 壺。  
 ツウブル *tsiburu* L 冬瓜（とうがん）。  
 ツウブルヤンヌ *ʃtʃiri* L 頭  
痛薬。  
 ツウリウ *tsiri* F 釣瓶（つるべ）。  
 ツウル *tsiru* F 絃（げん）。  
 ッスカビウ *ssukabi* L 白紙。  
 ッフマイ *ʃʃumai* L 黒米。  
 テイー *ti:* L 手。  
 テイーサーフ *ti:sa:ʃu* L 手仕事。  
 テイーサズウ *ti:sadzi* L 手ぬぐい。タオル。  
 テイーパン *ti:pan* L 手足。  
 テイキ *tʃi:* F 敵。  
 テイダ *tida* L 太陽。  
 テイマー *tima:* L 給料。月給。手間賃。俸給。  
 テイル *tiru* L ざる。  
 テイン *tin* F 空。天。  
 テインブツウ *tinʃutsu* F 天の星。  
 テインマ *tinma* F 伝馬船。  
 デンシャ *denʃa* L 電車。  
 ドウー *du:* L 己。自分。本人。体。身体。  
 ドウーカキウ *du:kaki* L 体を掻くこと。  
 ドウーフカ *du:ʃuka* L 自分以外。  
 ドウーブニ *du:]buni* 体の骨。筋肉。  
 ドウール *du:ru* L 泥。  
 トウク *tʃuku* F 床。  
 トウク *tʃuku* F 仏壇。



- ドウク duku L 毒。  
 トウクスマー tukunuma: L 床の間。家の中にある座床。  
 トウズウ tudzi F 妻。  
 ドウスウ dusi F 親友。  
 ドウスウニンジュ dusinindzu F 友達。  
 トウズウブドウ tudzibudu F 夫婦。  
 トウツウ tūtsi L 唾。  
 トウナガ tunaga L 卵。  
 トウススク tunusuku F 登野城。  
 トウム tumu F お供。  
 トウモーリウ tumo:ri L 海。  
 トウモーリウイズ tumo:riidzu L 海の魚。  
 トウモーリウスク tumo:risuku L 海底。  
 トウラ tura F 虎。  
 トウリウ turi F 鳥。鶏。  
 トウルクビ turukubi L 暴風戸。  
 ドウルミズウ durumidzi L 泥水。  
 トー to: F くぼみ。  
 トーフー to:φu: L 豆腐。  
 トーフマミ to:φumami L 大豆。  
 トーフヤー to:fuja: L 豆腐屋。  
 ナー na: L 縄。  
 ナー na: F 名前。  
 ナーザ na:dza F 翌日。  
 ナイ nai L 地震。  
 ナカ naka L 中。間。  
 ナカブニ nakabuni L 風の中の骨。  
 ナキジン nakidzin L 今帰仁。  
 ナサキ nasaki L 情け。人情。  
 ナサビウ nasabi L ナス。  
 ナタ nata L 鉦。  
 ナダ nada L 涙。  
 ナツウ natsi F 夏。  
 ナバ naba L キノコ。シイタケ。マツタケ。  
 ナビ nabi L 鍋。  
 ナマ nama L 今。現在。  
 ナマイズ namaidzu L 生魚。  
 ナマスウ namasi L 刺し身。酢の物。  
 ナマズウラームヌ namadzira:munu L 生意気者。  
 ナリウ nari F 果实。実。  
 ニー ni: L 根。  
 ニームツウフニ ni:mutsiφuni L 貨物船。  
 ニガイ nigai L 願ひ。祈願。  
 ニク niku L 肉。  
 ニスウカジ nisikadzi F 北風。  
 ニツウ nitsi L 熱。  
 ニムトウ nimutu L 根元。  
 ニューガク nju:gaku F 入学。  
 ニンガズウ ningadzi L 二月。  
 ニンジュ nindzu L 人数。  
 スー nu: L 野原。  
 スーナカ nu:naka L 野原。  
 スービウー nu:bi: L 野火。  
 スーマヤー nu:maja: L 野良猫。  
 スーヤキウ nu:jaki L 野焼け。  
 ススウトウリウ nusituri L 泥棒。盗人。  
 スツウ nutsi L 命。  
 スドウ nudu L 喉。  
 スン nun L 蚕 (のみ)。  
 スン nun L 蠶 (のみ)。  
 ネーラ ne:ra F 右。  
 ネーラカタ ne:rakata F 右肩。  
 パー pa: F 葉。  
 パーキ ba:ki L 平ざる。  
 ハイ hai L 南。  
 バイ bai F 芽。  
 パイ pai F 灰。  
 パイ pai F ハエ。  
 パイ pai F 礼拝。  
 ハイカジ haikadzi L 南風。  
 バイリウ pairi L 酢。  
 パカ paka F 墓。  
 バギウ bagi L 脇。  
 バギウバダ bagibada L わき腹。  
 ハク haku F 箱。  
 ハシカニツウ hafikanitsi L 麻疹熱。  
 バズウ badzi L 罰。  
 ハズウン hadzin F 蜂。  
 バダ bada L おなか。腹。  
 パダ pada L 肌。  
 ハタギ hatagi L 畑。  
 ハダシパン hadafipan F 裸足。  
 パツウ patsi F 箸。  
 パツウ patsi F 橋。  
 ハナ hana L 花。  
 パナ pana F 鼻。  
 ハナギー hanagi: L 花木。  
 ハナスウキウ hanasiki F 風邪。感冒。  
 パナミズウ panamidzi F 鼻水。  
 パニ pani F 羽。  
 バヌ banu L 自分。僕。私。我。  
 ハブ habu F ヘビ。  
 パラー para: L 柱。  
 ハリムヌ harimunu F 腫れ物。  
 パリムヌ parimunu F 腫物。  
 パン pan L 足。  
 ピー pi: L 火。  
 ピー pi: L リーフ。  
 ピーカジ pi:kadzi L 全く雨がないう台風。  
 ピーダリウ pi:dari L 左。  
 ピュージュー pi:dzu: F 一日中。  
 ピウカリウ pikari L 光。  
 ピウサイ pssai F 平得。

ビウサイムラ *pssaimura* F 平得村。  
 ビウダリウカタ *pidarikata* L 左肩。  
 ビウトウイ *pitui* L 一日。  
 ビウトウゲー *pitugu*: L 一個。  
 ビウマ *pima* F 暇。  
 ビギウスウ *bigiusi* F 牡牛。  
 ビギドゥン *bigidun* F 男。  
 ビギピビジャ *bigipibidza* F 雄ヤギ。  
 ヒコーキ *hiko:ki* L 飛行機。  
 ビズウ *pidzi* F 肘。  
 ビタ *pita* F 下手。  
 ビダ *pida* L 褌 (ひだ)。  
 ビダリウティー *pidariti*: L 左手。  
 ビトウ *pitu* F 人。人間。他人。  
 ビニ *pini* F 髭。あご髭。  
 ビビジャ *pibidza* F ヤギ。  
 ピャーク *pja:ku* L 百。  
 ピラフ *piraφu* L 寒い風。  
 ビン *bin* F 弁。  
 ビン *pin* F ニンニク。  
 ファーナスウ *φa:nasi* F 出産。  
 ファイムヌ *φaimunu* F 食べ物。  
 プー *pu*: F 穂。  
 プー *pu*: F 帆。  
 プーガー *φu:ga*: L 大川。  
 プースヌ *bu:nunu* L 麻布。  
 フカドゥミ *φukadumi* L 妾。  
 フガラムスウ *φugaramusi* L 毛虫。  
 フク *φuku* L 肺。  
 フク *φuku* F 茎。  
 フクル *φukuru* L 袋。  
 ブシャ *bu:fa* F 腰。  
 ブジャ *budza* L 伯父。  
 ブシャブニ *bu:fabuni* F 腰骨。背骨。  
 ブスウ *busi* L 関節。節。  
 ブスウ *busi* L 武士。  
 フチャカリウ *φut[ʃa]kari* 草刈り。  
 フチャリウムヌ *φutfarimunu* L 腐れもの。  
 フチリウ *φutʃiri* L 葉。  
 フツウ *φutsi* F 口。  
 ブツウ *pʊtsi* F 星。  
 フツウナカ *φʊtsinaka* F 口中。  
 フツウマ *φʊtsima* L 黒鳥。  
 ブツォーマ *pʊtsɔ:ma* F へそ。  
 フデイ *φudi* F 筆。  
 ブドウ *budu* F 夫。亭主。  
 ブトウスウ *pʊtsu* L 同年。  
 ブドウドウイ *bududui* L 一昨日。  
 ブドゥリウファー *buduriφa*: F 踊り子。  
 ブドー *budo*: F 葡萄。  
 フナズウナ *φunadzina* L 舳い綱。  
 フナズウミ *φunadzimi* L 船積み。

ブナリウ *bunari* F 姉妹。姉さん。  
 フニ *φuni* L 船。  
 プニ *puni* L 骨。  
 フニン *φunin* F ヒラミレモン。ミカン。  
 フネー *φune*: L 船酔い。  
 フバナーギ *φubana:gi* F 感謝儀礼。  
 フビ *φubi* F うなじ。  
 フビウマーイイ *φubimai:i* F 襟回り。  
 フユ *φuju* F 冬。  
 ブラ *buru* L 汽笛。  
 ブリ *buru* L 無礼。失礼。  
 フワー *φwa*: F 子。  
 フワーマー *φwa:ma*: F 子孫。  
 ボーシ *bo:ʃi* F 帽子。  
 ホン *hon* F 本。  
 マー *ma*: L 孫。  
 マーウリウ *ma:uri* F マクワウリ。  
 マーギラ *ma:gira* F シャコガイの一種。  
 マース *ma:su* L 塩。  
 マーフワー *ma:ʃφwa*: 孫と子供。子孫。  
 マーミ *ma:mi* L 豆。大豆。  
 マーリウ *ma:ri* L 毬。  
 マイ *mai* L 前。  
 マイ *mai* F 米。  
 マイカリウ *maikari* F 稲刈り。  
 マイダーラ *maida:ra* F 米俵。  
 マイダニ *maidani* F 米の種。  
 マイフクル *maiφukuru* F 米袋。  
 マキウ *maki* F つむじ。  
 マキウ *maki* F 牧場。  
 マキタバグ *makitabagu* F 巻煙草。  
 マサイミ *masaimi* L 正夢。  
 マツウ *matsi* F 町。  
 マツウリウ *matsiri* F 祭り。  
 マドウ *madu* L 暇。  
 マドウ *madu* L 窓。  
 マトウム *matumu* F 正気。  
 マミ *mami* L 心臓。  
 マミナー *mamina*: L モヤシ。  
 マヤ *maja* L 猫。  
 マユ *maju* L まゆ毛。  
 マラリアー *mararia*: L マラリア。  
 マラリヤニツウ *mararijanitsi* L マラリアによる熱。  
 マリジョー *maridzo*: F 生まれ付き。天性。  
 マリドゥスウ *maridusi* F 生まれ年。生年。  
 マリファー *marifi*: F 生まれた子。  
 ミー *mi*: L 目。  
 ミー *mi*: L 小さい穴。  
 ミーウスウ *mi:usi*: L 雌牛。  
 ミーダスウ *mi:dasi* F (汁の) 具。  
 ミードゥン *mi:dun* L 女。  
 ミース *mi:nu* フツウリ *mi:nu φʊtsiri* L L 目薬。

- ミーハナ mi:hana L 顔。  
 ミシユカミ mifukami L 味噌甕。  
 ミシユダル mifudaru L 味噌樽。  
 ミズウタマリウ midzitamari F 水溜り。  
 ミツウ mitsi F 道。  
 ミツウバタ mitsipata F 道端。  
 ミドウナー miduna: L 女の子。  
 ミナガ minaga L 外。庭。  
 ムカスウ mukasi L 昔。  
 ムカスウパナスウ mukasipanasi L 民話。昔話。  
 ムカスウムニ mukasimuni L 昔言葉。諺。  
 ムカスウユー mukasiju: L 昔の世。  
 ムク muku L 婿。  
 ムス musu L 筵 (むしろ)。ござ。畳。  
 ムトウ mutu L 元。  
 ムトウ mutu L 茎。  
 ムトウメーラ mutume:ra L 本宮良。  
 ムニ muni L 言葉。  
 ムヌ munu L 物。  
 ムム mumu L 腿。  
 ムムツタリウ mumuttari L 腿。  
 ムラ mura F 村。  
 ムラジュー mura]dzu: 村中。  
 ムラナカ muranaka F 村中。村の中。  
 ムラムラ mura]mura 村々。  
 ムン mun L 麦。  
 ムンカリウ munkari L 麦刈り。  
 ムングルボーシ muṅgurubo:]i L 麦わら帽子。  
 ムンチュー munt]u: F 門中。  
 ムンハタギ mun]hatagi L 麦畑。  
 メー me: F 広場。  
 メーグ me:gu F 宮古。  
 メーグスウマ me:gusima F 宮古島。  
 メーラ me:ra F 宮良。  
 メーラバツウ me:rabatsi F 宮良橋。  
 モーギ mo:gi L 利益。  
 ヤー ja: L 家。  
 ヤーカク ja:kaku L 屋敷。  
 ヤーカズウ ja:kadzi L 各家。家ごと。  
 ヤーキナイ ja:kinai L 家族。家庭。  
 ヤークビ ja:kubi L 家の壁。  
 ヤータクリ ja:takuri L 血統。  
 ヤーツウクル ja:tsikuru L 家造り。建築。  
 ヤートウズウ ja:tudzil L 本妻。  
 ヤーニンジュ ja:nindzu L 家族。  
 ヤーススウ ja:nusi L 家主。  
 ヤーフキウ ja:fyuki L 家葺き。建築。  
 ヤームトウ ja:mutu L 実家。本家。  
 ヤイマ jaima F 八重山。  
 ヤイマスウマ jaimasima F 八重山島。  
 ヤイマスバ jaimasuba F 八重山蕎麦。  
 ヤキナサビウ jakinasabi L 焼き茄子。  
 ヤギピウトウ jagipitu L やせた人。  
 ヤクバ jakuba L 役場。  
 ヤサイ jasai L 野菜。  
 ヤサイダニ jasaidani L 野菜の種。  
 ヤサイハタギ jasai]hatagi L 菜園。  
 ヤドウ jadu L 戸。扉。  
 ヤドウ jadu L 宿泊所。宿。  
 ヤナカーギ janaka:gi L 不美人。  
 ヤナカザ jana]kadza 悪臭。  
 ヤナグトウ jana]gutu 悪事。  
 ヤナゴーサ jana]go:sa 酷い痒さ。梅毒。  
 ヤビ jabi L 誘惑。  
 ヤブ jabu F 鍼灸師 (しんきゅうし)。  
 ヤブ jabu F 妾。  
 ヤマ jama L 林。  
 ヤマ jama L 仕掛。罫。  
 ヤマウン jamaun L 山芋。  
 ヤマドウ jamadu L 日本。  
 ヤマナカ jamanaka L 山中。林の中。  
 ヤラビ jarabi L 子供。幼児。  
 ユイ jui F 柄。  
 ユー ju: L お湯。  
 ユーフル ju:φuru L 風呂。  
 ユク juku L 横。  
 ユダ juda F 枝。  
 ユネン junen L 夜。  
 ユノン junon F 与那国。  
 ユビ jubi L 指。  
 ユリ juri F テッポウユリ。  
 ヨイ joi L お祝い。  
 ヨイキウん joikin L お祝いの着物。晴れ着。  
 ヨイザー joidza: L 祝宴。  
 ヨイヌ ナーザ joinu na:dza L F 祝いの翌日。  
 ヨイヤー joija: L 祝い事の家。  
 ヨーフク jo:φuku L 洋服。  
 リツウ ritsi L 列。  
 ワキ waki L 訳。  
 ワヌ wanu F あなた。お前。君。汝。  
 ンゾ ndzo L 彼女。  
 ンタ nta L 土。  
 ンナカク nnakaku F 空き屋敷。  
 ンナカクヤスウキウ nnakakujasiki F 空き家。空き家の屋敷。  
 ンナスウマ nnasima F 無人島。  
 ンナズウル nnadziru F 空汗。  
 ンニ nni F 胸。  
 ンニ nni F 群れ。  
 ンニザン nnidzan F 暗算。  
 ンニブニ nnibun F 胸骨。  
 ンマ nma L 馬。

## 7. 展望

以上、八重山語宮良方言のアクセント体系に関する初期報告を行った。すなわち、単純名詞は2つのアクセント型が区別され、通常の複合語は複合アクセント法則が成立することを報告した。なお、複合語の中に形態素境界に下降が生じるパターンがあることも指摘し、また、アクセント型の所属と琉球祖語の系列との対応関係について述べた。

しかし、本報告はあくまで単独発話と1拍助詞が後続する粹文という限られたデータに基づいており、宮良方言のアクセント体系を十分に解明できているとは言えない。なぜならば、八重山諸方言の中に、単独発話と1拍助詞が後続する環境では対立するアクセント型が中和すると報告されている方言があるからである(松森 2016)。今後、調査範囲を増やすことによって、新たなアクセント型の対立が認められる可能性が十分にある<sup>9</sup>。

## 参考文献

- 青井隼人 (2018) 「南琉球宮古多良間方言におけるピッチ上昇：複数の韻律句が連続する場合のピッチパターンの記述」『国立国語研究所論集』14: 1-27.
- 秋永一枝 (1960) 「八重山方言一・二音節名詞のアクセントの傾向」『国語学』41: 121-125.
- 麻生玲子・小川晋史 (2016) 「南琉球八重山語波照間方言の三型アクセント」『言語研究』150: 87-115.
- 新垣公弥子 (2000) 「沖縄県石垣市宮良方言の活用体系」『千葉大学日本文化論叢』1: 108-96.
- Arakaki, Kumiko (2004) The system of phoneme in the Ishigaki dialects of Luchuan: The Miyara dialect. 『千葉大学日本文化論叢』5: 106-87.
- 五十嵐陽介 (2015) 「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文化学研究』8: 1-42.
- 五十嵐陽介 (2019) 「日琉語類別語彙 (2019年5月17日版)」[https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase\\_contents/detail/238738/86b4e49faf0f27bf29c1cf84fc6bc37?frame\\_id=729332](https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/detail/238738/86b4e49faf0f27bf29c1cf84fc6bc37?frame_id=729332), (アクセス 2021年6月1日).
- 石垣市企画部企画政策課 (編) (2019) 『統計いしがき平成30年度 第41号』石垣市: 石垣市.
- 石垣實佳 (2013) 『メーラム二用語便覧』石垣市: 南山舎.
- 伊豆山敦子 (1997) 「琉球・石垣宮良方言の動詞語形変化」『獨協大学教養諸学研究』31(2): 1-26.
- 伊豆山敦子 (1999) 「八重山・宮良方言動詞言い切りの形と意味・用法—琉球方言のテンス・アスペクト・モダリティー研究のために」『獨協大学諸学研究』2(2): 111-133.
- 伊豆山敦子 (2000) 「琉球・八重山・石垣(宮良)方言の動詞言い切りの形」『アジア・アフリカ文法研究』29: 65-91.
- 伊豆山敦子 (2001a) 「琉球・八重山(石垣宮良)方言条件表現とアスペクト・モダリティー的側面」『マテシス・ユニヴェルサリス』2(2): 1-26.
- 伊豆山敦子 (2001b) 「八重山(石垣宮良)方言の「過去」をめぐる問題点」『マテシス・ユニヴェルサリス』3(1): 69-91.
- Izuyama, Atsuko (2003) The grammar of Ishigaki Miyara dialect in Luchuan. In: Atsuko Izuyama (ed.) *Endangered languages of the Pacific rim studies on Luchuan grammar*, 1-162. Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- 上野善道 (2010) 「琉球与那国方言のアクセント資料 (1)」『琉球の方言』34: 1-30.
- 上野善道 (2011a) 「与那国方言動詞活用形のアクセント資料」『琉球の方言』35: 105-121.
- 上野善道 (2011b) 「与那国方言動詞活用形のアクセント資料 (2)」『国立国語研究所論集』2: 135-164.
- 上野善道 (2012) 「N型アクセントとは何か」『音声研究』16(1): 44-62.
- 上野善道 (2013) 「琉球与那国方言体言のアクセント資料 (2)」『琉球の方言』37: 109-142.
- 上野善道 (2014) 「琉球与那国方言のアクセント資料 (3)」『琉球の方言』38: 69-92.
- 上野善道 (2016) 「琉球与那国方言体言のアクセント資料 (5)」『琉球の方言』40: 71-105.
- 荻野千佐子 (2018) 「南琉球石垣市宮良方言の ujoohuN 一視点がない授受動詞の謙讓語一」『日本語の研究』

<sup>9</sup> 実際、地名名詞(「宮良」「大和」「多良間」など)は3つのアクセント型が対立する可能性がある(荻野千佐子氏私信)。

- 14(4): 14-30.
- 加治工真市 (1998) 「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』 10: 265-320.
- 加治工真市 (2001) 「古見方言の基礎語彙」『沖縄芸術の科学：沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』 13: 1-104.
- 加治工真市 (2012) 「続古見方言の基礎語彙」『琉球の方言』 36: 29-55.
- 加治工真市 (2013) 「続古見方言の基礎語彙 (2)」『琉球の方言』 37: 87-107.
- 加治工真市 (2014) 「続古見方言の基礎語彙 (3)」『琉球の方言』 38: 157-178.
- 加治工真市 (2020) 『鳩間方言辞典』東京：国立国語研究所.
- 狩俣繁久 (編) 『琉球諸語記述文法 I』 沖縄：琉球大学.
- 久野マリ子 (1990) 「第 3 章 アクセント」 國學院大学日本文化研究所 (編) 『琉球竹富島の方言：黒潮文化圏の言語研究』 77-116. 東京：國學院大学日本文化研究所.
- 国立国語研究所 (1966) 『日本言語地図第 1 集：付録 A 日本言語地図解説：方法』 東京：国立国語研究所.
- 下地賀代子 (2010) 「石垣・宮良方言の係助辞 -du の文法的意味役割」『日本語文法』 10(2): 143-159.
- セリック・ケナン (2021) 「下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告」『言語記述論集』 13: 215-290.
- Davis, Christopher (2013) Surface position and focus domain of the Ryukyuan focus particle du: Evidence from Miyara Yaeyaman. *International Journal of Okinawan Studies*, 4(1): 29-49.
- Davis, Christopher (2014) 「沖縄県宮良方言」石原昌英 (編) 『文化庁委託事業危機的な状況にある言語・方言の実態に関する調査研究 (八丈方言・国頭方言・沖縄方言・八重山方言) 報告書』 93-101. 西原町：国立大学法人琉球大学国際沖縄研究所.
- Davis, Christopher (2015) 「八重山語宮良方言の動詞屈折論」狩俣繁久 (編), 120-136.
- Davis, Christopher (2016a) 「八重山語・宮良言葉：記述文法と学習資料に向けた形容詞の記述」琉球大学国際沖縄研究所 (編) 『シマジマのしまくとぅば：危機的な状況にある言語・方言のアーカイブ化を想定した実地調査研究：文化庁委託事業報告書 I』 137-144. 沖縄：琉球大学島嶼地域科学研究所.
- Davis, Christopher (2016b) 「八重山語宮良方言の音素目録と定動詞屈折形態論」狩俣繁久 (編), 172-190.
- Davis, Christopher & Lau, Tyler (2015) Tense, aspect, and mood in Miyara Yaeyaman. In: Heinrich Patrick, Shinsho Miyara & Michinori Shimoji (eds.), *Handbook of the Ryukyuan languages: History, structure, and use*, 253-298. Berlin/Boston/Munich: De Gruyter Mouton.
- 中川奈津子・セリック ケナン (2019) 「琉球八重山白保方言のアクセント体系は三型であって、二型ではない」『日本語学会 2019 年度春季大会予稿集』 89-96.
- 中川奈津子・セリック ケナン (2020) 「南琉球八重山語白保方言の語彙リスト：名詞を中心に」『琉球の方言』 44: 283-306.
- 仲原穰 (2003) 「石垣島宮良方言の音韻研究序説」『琉球の方言』 27: 139-157.
- 仲原穰 (2005) 「小浜方言と宮良方言の音韻の比較研究」『琉球の方言』 29: 107-120.
- 中松竹雄 (1987) 『琉球方言辞典』南風原町：那覇出版社.
- 平山輝男 (1936) 「南九州アクセントの研究 (1) (2)」『方言』 6(4): 26-76, 6(5): 50-63.
- 平山輝男・中本正智 (1964) 『琉球与那国方言の研究』東京：東京堂.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院.
- 松森晶子 (2000a) 「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙 3 拍語の合流の仕方—」『国語学』 51(1): 93-108.
- 松森晶子 (2000b) 「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』 4(1): 61-71.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島における 3 型アクセント体系の発見：与那覇方言の場合」『国立国語研究所論集』 6: 67-92.
- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系：その韻律単位に関する考察」『日本女子大学紀要. 文学部』 64: 55-92.
- 松森晶子 (2016) 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み：その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件」『言語研究』 150: 59-85.
- 前新透・波照間永吉・高嶺方祐・入里輝男 (2011) 『竹富方言辞典』石垣市：南山舎.
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』那覇市：沖縄タイムス社.
- 与那国方言辞典編集委員会 (編) (2021) 『どうなんむぬい辞典 第 2 版』与那国町：与那国町役場.
- ローレンス・ウエイン (1997a) 「鳩間方言のアクセント—名詞」『沖縄文化』 85: 1-26.

- ローレンス・ウエイン (1997b) 「鳩間方言のアクセント：数詞 / 助数詞」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』9: 1-22.
- ローレンス・ウエイン (2000) 「八重山方言の区画について」石垣繁 (編) 『宮良當壮記念論集』547-559. 石垣市：宮良當壮生誕百年記念事業期成会.
- ローレンス・ウエイン (2006) 「沖縄方言群の下位区分について」『沖縄文化』40: 101-118.
- ローレンス・ウエイン (2008) 「与那国方言の系統的位罫」『琉球の方言』32: 59-67.
- ローレンス・ウエイン (2013) 「竹富島方言アクセントと「系列別語彙」：附竹富島方言版「北風と太陽」」『琉球の方言』37: 1-24.
- ローレンス・ウエイン (2019) 「竹富島方言アクセント (2)」『琉球の方言』43: 97-129.
- ローレンス・ウエイン (2020) 「アクセント変化から見た琉球方言の系統樹と日本祖語音調から見た琉球祖語音調」シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」発表資料.

## Report on the Lexical Prosodic System of Nouns in the Southern Ryukyuan Yaeyama Miyara Dialect

CELIK Kenan<sup>a</sup>      ASO Reiko<sup>b</sup>      NAKAZAWA Kohei<sup>c</sup>

<sup>a</sup>Language Variation Division, Research Department, NINJAL

<sup>b</sup>Meio University

<sup>c</sup>The University of Tokyo

### Abstract

In this report, we present the results obtained during remote fieldwork on the lexical prosodic system of the Southern Ryukyuan Miyara dialect. First, simplex nouns exhibit a two-way tonal contrast between ‘falling’ and ‘flat’ word-tones, as reported in the previous literature. Second, the tonal pattern of most of the compounds follows the so-called ‘compound rule’, whereby the pattern of the whole compound is determined by the tonal class of its first component. Third, a regular correspondence is found between the tonal classes of Miyara and the tonal classes (A, B, C) reconstructed for proto-Ryukyuan, i.e., words belonging to the falling word-tone correspond to class A, whereas words belonging to the flat word-tone correspond to B and C classes. Lastly, we present the tonal class of 720 nouns.

**Keywords:** Miyara dialect, Lexical prosodic system, Compound rule